弁護士法人神戸シティ法律事務所

News Letter

Vol. 8

喜 び と 笑 顔 に 出 会 う た め に

H30.1.1 発行

謹 賀 新 年

インターネット社会の発展はとどまるところを知りません。IOT、ビットコイン、人工知能、フィンテックと私たちの生活の便利さはどんどん高度化していき、SNS では個人の活動が瞬時に共有されていきます。先日、ヨーロッパを旅行いたしましたが、スマホの翻訳アプリを使えば、スペイン語だってポルトガル語だって、スマホを差し出すだけでタクシーの運転手とも会話がはずむのです。

「スモールデータの活用」をご存知でしょうか。「ビッグデータ」が何万何億もの情報からある特定の価値ある情報を統計学的に見つけていくためのデータなのに対して、スモールデータはひとりひとりが発信する情報、「いいね」というような小さなデータをコンピュータが分析して、その人の趣向や思想を割り出していくというデータをいうようです。個人が発するクレジットカードでの購入履歴、メール、SNS などの発信を探索し、その人がこれから必要になるものや欲しいものを勧めたり、あるいは自動的に欲しい商品が届いてしまうところまで行き着くというのです。人工知能は、自分自身よりもよく自分のことを理解してしまうのです。もう意味がわかりません。しかし、これが実態です。

一昨年からさまざまなところにお邪魔して勉強させていただいておりますが、昨年、篠山市の一般社団法人 NOTE 代表の金野幸雄さんをお訪ねしました。城下町篠山が古民家再生でも農業再生においても見事な実績を残されています。大切に保存されてきた日本のくらしと文化、それを発見できる知恵と行動力さえあれば、ひとがやはり今も求めているフェイス to フェイスのつながりの大切さが見えてまいります。

特に旧いものを探しているわけではありません。しかし、これだけの変化が一度にやってきますと、人間や社会の本質を見極めていく作業が必要になっていると感じます。経済優先で進展していく今の時代で、自分を見失わないように、また、自社の方向性を見失わないように、常に原点を顧みることが重要です。グーグルマップではなく、自分の目で北極星を見て確認することが重要になっていると思います。

今年私たちは、きっと、もっと揺らされ振られ続けていくでしょう。道先案内人を買って出る限り、原点を見つめながら、自分に集まるスモールデータを自分で確認し分析しながらしっかりと進んでまいりたいと考えています。

弁護士法人神戸シティ法律事務所
代表社員　弁護士　井 口　寛 司

（表紙写真：ポルトガル・ポルト／ドウロ川河口にて）

サグラダ・ファミリア

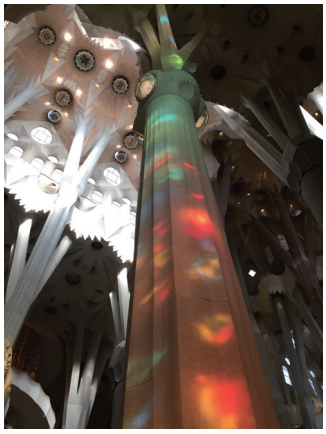
弁護士　井　口　寛　司

ガウディ建築を見る機会を得ました。弁護士になって初めて2週間の休暇をとりスペイン・ポルトガルを旅行したのです。最初に訪問したカタルーニャ州バルセロナ。独立のための国民投票で揺れ、プチデモン首相が身柄拘束され、デモやゼネストが連日起こっている中での訪問でありましたが、幸い、何事もなくガウディ建築の数々を堪能することができました。

（生誕のファサード）

あまりにも有名な、いまだ建築中のサグラダファミリア大聖堂。ガウディ没後 100 年となる2026年には完成と公言されているようですが、それでも完全なる完成ではなく、その後も建築は続くのだといいます。その中央にそびえるべき 170 メートルの高さを擁する「イエスの塔」は今まさにクレーンによって部材が吊り上げられながら建築されている最中なのです。

ガウディ建築の特徴とされる双曲線面、放物線面と懸垂曲線。その組み合わせが織りなす、なんともいえない図形のなかに、言葉では言い表すことのできない荘厳さと落ち着きと安らぎ、そして感動があります。聖堂内部に入るとさらに息をのみます。6角が12角となり、それが 24 角となり、上に行くほど角が増えいってやがて円柱になる柱は、子どものころに畑に寝転がって空に向かって伸びている野菜の茎を見上げていたことを思い出す懐かしさがありました。そして、自然光だけで映し出される柱の虹色の輝き。写真やテレビでは見たことがあったものの、現実に見たときの興奮は静かな聖堂で心がざわめくという感じでした。



（大聖堂内部）

日本人としてすでに 40 年近くもサグラダファミリアの建築にかかわっている外尾悦郎さん。世界遺産となった「生誕のファサード」を完成させた外尾さんは、その著書『ガウディの伝言』（光文社新書）で、サグラダファミリアには図面がない、その理由は「ガウディの頭の中で生み出される作品のイメージが、二次元の図面では表現しようのないものになっていったことが大きかったのではないか。」と言います。実際につくっていったのはほかでもない職人たる石工たち。ガウディが模型を示しながら、こういうものをつくれないか？と提案する。その模型はあり得なく高い技術と苦労を要することが明らかなのですが、それを見せられた職人たちは「自分たちの技術でつくってみせなければ気が済まなくなる。」のだと、そして「そのとき湧いてくる一人一人の意欲と、職人たちの頭に描かれる三次元的な構図こそが最大の図面だ」そうガウディは考えていたのだろうというのです。図面を示され、この通りにやるように指示されなかったからこそ想像力が働き、人間の 100%以上の力が出たのではないかと言うのです。

「諸君、明日はもっと良いものをつくろう。」ガウディは一日の仕事を終え、職人たちにそう言ってサグラダファミリアを出たあと市電に轢かれて亡くなりますが、ガウディは、もっとも人間の意欲と力を引き出す方法を見抜いていたのだというのです。どんな職人でも、全体を考えさせず、細かい作業を義務としてやらせると確実にその人はダメになるといいます。今日まで、サグラダファミリアでは工事中に死亡事故は一件も起きていないのです。

外尾さんは、ガウディもいない、図面もないサグラダファミリアの建築をまかされたとき、ガウディがつくろうとしたものを考えるのではなく、ガウディが見ていた方向を見るようにしたと言います。

大聖堂の生誕の門の遥か上の方にペリカンの親子像の彫刻があります。食べ物がなくなり子どもが飢えそうになると母ペリカンが自分のお腹にくちばしを突きさして血を飲ませたという言い伝えに基づきます。しかし、その像がずっと遠くに行かないと視界にはいらないのです。大事なものは近くにいるときには見えないことを物語っている。外尾さんは言います。

（カサ・ミラ屋上の換気塔）

自分の生きている時代で完成するはずのないものを、時代を超えてつくっていく。サグラダファミリアといくつかのガウディ建築は、なまなましいこの世を生きている私に、遠くから静かなメッセージを送ってくれました。　　感謝。